

主体的に自分の思いや考えを伝え合うことのできる児童の育成
～習った英語をコミュニケーション場面で使えるために～

日置市立湯田小学校 教諭 島田 美樹

【推薦のポイント】

- 相手意識・目的意識を明確にして，児童が英語を使用しながらコミュニケーションを図りたくなるような必然性のある課題設定がなされ，言語活動を展開していく際の具体的な内容や方法がまとめられています。
- 既習事項を想起させ，繰り返し使わせることで，英語の「慣れ親しみ」から「習得」につなげる効果的な実践が大いに参考になるものです。

目 次

1	研究主題設定の理由	1
2	研究の仮説	1
3	研究の具体的な内容	1
4	研究の実際	2
5	研究のまとめ	7
6	おわりに	7
○	参考文献	7

1 研究主題設定の理由

(1) 今日の課題や時代の要請から

今日においては、経済、社会の様々な面でのグローバル化や地球環境問題など国際的な理解と調和が不可欠となってきた。絶えず国際社会を生きるという広い視野をもち、だれもが世界において活躍できる可能性をもっている。また、IT革命の進展により、知識や情報を入手、理解し、さらに発信、対話する能力が強く求められている。このような状況の中、英語は母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠である。今後のグローバル化の進展の中で「英語が使える日本人」を育成する必要がある。

(2) 令和3年度鹿児島県学習定着度調査の結果から

令和3年度の中学校1年生鹿児島県学習定着度調査の結果より、「言語材料をコミュニケーション場面で使いこなす力を身に付けさせていない。」という課題が挙げられた。授業改善のポイントとしては、「既習事項を自在に使いこなせるようになるには、それらをコミュニケーション場面で使う経験を繰り返す必要がある。身に付けるべき表現を使う必然性のある場面を設定した上で、誤りがあったら修正を加えながら徐々に表現の正確さを高めていく。」ことが挙げられている。また、「何のために」「誰に対して」などの目的を明確にしながら、コミュニケーション場面で英語を使う経験を繰り返す必要がある。小学校のうちから英語を使うことへの目的や相手を意識させ、自分たちの言葉で自分たちの思いを伝えることを大切にしながら指導していきたいと考えた。

(3) SET 加配という立場から

東市来地域ではSET 加配が配置されて2年目となる。湯田小学校・鶴丸小学校・伊作田小学校・美山小学校・上市来小学校の5校の多くの子どもが、東市来中学校に進学することとなる。多い学級では42人、少ない学級では7人と人数差だけでなく、これまでに積み重ねてきた外国語の力も様々であった。しかし、学校によって実態差はあるものの、基本的に子どもたちは楽しんで外国語科の授業に参加している。SET 加配が配置されたことで、東市来中学校へ進学する子どもの外国語の土台をそろえていくことができる。できるだけ同じ体験をさせ、同じ経験を積むことで、小学校で習ったことを同じスタート地点から中学校で使っていくことができるようになる。コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を平等に育成し、中学校へのつながりを意識させていきたい。

2 研究の仮説

【仮説1】必然性のあるゴール設定

外国語を用いて子どもたちが「～したい」と思えるような必然性のある目標課題を設定していくことで学びの価値を見だし、自ら学びに向かおうとするのではないか。

【仮説2】既習表現を想起させる

既習表現を繰り返し想起させることで、コミュニケーション場面で習った英語を使いながら、自分の思いや考えを伝えようとするのではないか。

3 研究の具体的な内容

(1) 【仮説1】必然性のあるゴール設定における手立て

- ア CIR を活用し、相手意識を高める。
- イ ビデオレターの作成し、コメントをもらうことで、達成感を味わわせる。
- ウ Zoom を活用し、世界中の人とのつながりを実感させる。
- エ 他校子どもとのつながりで、視野を広げる。
- オ 6年生との交流で、1年後の自分をイメージさせる。

(2) 【仮説2】既習表現を想起させるための手立て

- ア 自己調整の時間を確保し、自分の発表を見つめ直す。
- イ 既習表現集を活用することで、これまでの学習を振り返る。
- ウ Activity を取り入れ、やり取りでの力を身に付ける。
- エ 学習環境を工夫し、学習を振り返るものを設置する。

4 研究の実際

(1) 必然性のあるゴール設定

「自分の思いや考えを伝え合うことのできる力」を育成するためには、「何のために」「だれに対して」という動機づけが確立されていなければ、「先生に言われたことをやっている」だけの授業になってしまう。そこで、子どもたち自身で学びに向かうための目標設定が必要となる。

子どもたちが授業の目的を理解し、目的に向かって努力する姿を教師が見守っていけば、子どもたちは安心して学びに向かうことができる。子どもたちが「英語を使ってこのことを伝えたい」と思えるような相手を明確にし、目標課題を設定することにした。

ア CIR の活用

Junior Sunshine 6 「Lesson4 Welcome to Japan.」の単元では、海外の方へ日本のことを紹介するために身に付けるべき表現を使う必然性のある場面を設定した。そこで日置市立湯田小学校では、鹿児島県観光・文化スポーツ部国際交流課から2名の国際交流員 CIR を招待し、外国の方と交流する機会を設けた。実際に英語を使ってコミュニケーションを取りながら、相手に対して配慮を伴い、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けさせることができた。また、自分たちの発表したことに対して、直接質問されることで、質問に答えたり会話をつなげたりすることの大切さを改めて実感することができた。



イ ビデオレターの作成

同じく、Junior Sunshine 6 「Lesson4 Welcome to Japan.」の単元において、日置市立鶴丸小学校では、アメリカのワシントン州にある Chinook Middle School の子どもたちに日本紹介動画を作成した。いかに日本の魅力を伝えることができるか、使える英語を使って自分たちの言葉で伝えることを考えることができた。完成した動画を送り、アメリカの子どもたちからコメントをもらうことで子どもたちも実際に見て英語で伝わった喜びと、達成感を味わうことができた。



タブレット (iMovie) での動画作成



学校を紹介している様子



コメントを読んでいる
子どもたちの様子

ウ Zoom の活用

コロナ禍において発達したビデオ会議システム Zoom を活用する方法がある。ALT に協力してもらい、ALT の友人と Zoom でつなぎ、発表することができた。自分たちの作ったスクリーンを共有しながら直接聞いてもらうことができるので、子どもたちもジェスチャーや既習表現を使って自分の思いを伝えようとしていた。世界中の人と簡単につながることができるということを実感できていたようだ。しかしながら、時差なども考慮しながら、このように Zoom をつなぐ相手を見つけることが難しいのが現状である。



エ 他校子どもとのつながり

SET 加配という立場を生かして、東市来地域の子どもたちをつなげる活動にも取り組んだ。Junior Sunshine 5 「Lesson5 Where is my treasure?」では、「自分の学校を紹介しよう。」という学習課題を設定し、自分たちの学校の教室への道案内を動画で作成し、他校の子どもへ教室の道案内をクイズ形式でさせた。相手意識をもたせることで、声の大きさやスピード・アイコンタクトにより注意しながら動画を作成していた。道案内だけではなく、これまでに学習した“can”を使って自己紹介を取り入れながら発表する子も多かった。

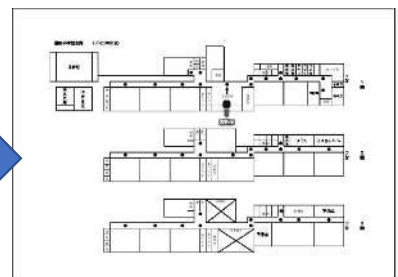
また、他校の発表を見ることで、自分たちの発表では気付かなかった他校のよい点を見つけることもできた。自分の学級の中だけでなく、より多くの人に発表を見てもらえることが、やり遂げたことの自信につながっていた。



① 自分の学校の教室案内の動画を撮る。



② 他校の紹介動画を見る。



③ 道案内の動画を見て、教室を探す。

オ 6年生との交流

Junior Sunshine 5 「Project 1 パーティーを楽しもう」では、これまで習った学習を生かして「クリスマスパーティーをしよう」という学習課題を設定した。これまでに習った英語を使ってのゲームやレクリエーションを考えたり、「We wish your Merry Christmas」を英語で歌ったりと、パーティーの準備を自分たちで率先して行っていた。また、ここでは6年生をクリスマスパーティーに招待することで、自分たちの習った英語の成果を知ってもらったり、発表につまずいたときは6年生に教えてもらったり、子どもたちだけでパーティーを進めていこうとする姿を見ることができた。6年生の英語を聞くことで1年後の自分たちをイメージしながら学習を進めていた。



(2) 既習表現を想起させる

ア 自己調整の時間の確保

既習表現を想起させるためには、自己調整の時間を確保することが大切である。そこで1単元の中に必ず自己調整の時間を設けることにしている。これまでに習った既習表現のことを「+1ワード」と称し、常に自分たちの発表の中で+1ワードを使うことができないか繰り返し指導を続けてきた。

また、個人活動→ペア活動→グループ活動と話し合いの時間を作ることで、子どもたち同士で発表の内容を考えたり修正したりすることができた。この活動を続けることで、個人で発表を考える段階で「+1ワードを入れることができないかな。」と自分で考えて入れることができるようになってきている子どもが増えてきている。まだ自分で入れていくことは難しい子どもも、友達からアドバイスを受け、発表時には+1ワードを入れられるようになった。今後は、発表場面だけでなくやり取りの場面においても+1ワードを使えるように指導を続けていきたい。

(ア) 授業の実際


過程	主な学習活動	時間 (分)	指導上の留意点 (※評価)
ふれる	1 Greetings ・ 英語であいさつをする。	3	○ 日付や曜日など既習事項を繰り返し取り扱うことで、英語に慣れさせる。
慣れる	2 Song ・ フォニックスソングを歌う。	2	○ 楽しい雰囲気をつくるようにする。
	3 Warm-up (1) 既習の英語表現を活用したクイズをする。 (2) 基本の発表を聞き、よりよい発表にするためにどんなことを付け加えれば良いかを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ Welcome to ~. ・ We have ~ in 場所. ・ It's ~. </div>	5 3	○ クイズをしながら、既習表現を練習させる。 ○ 単元のゴールとしてふさわしい ALT の発表を見せることで、本時の学習課題への意欲をもたせる。どのようなことを付け加えるとよりよい発表になるかを考えさせる。
	4 Today's Goal <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 日本のよさがもっと伝わるようにするためには、どんな工夫をすればよいだろうか。 </div>	2	

広げる	<p>5 Activity 1</p> <p>(1) 全体でポイントを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 目線 ○ 声の大きさ ○ ジェスチャー ○ 文を付け加える。 <p>(・I like～ ・You can～. など)</p> <p>(2) 個人で付け加えたい表現をワークシートに書き加えたり、発表を練習したりする。</p> <p>(3) よりよい発表にするためにどんな工夫をするとよいかペアで助言し合う。</p> <p>6 Activity 2</p> <p>自分のグループ内でお互いの発表を確認し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ Welcome to Japan. ・ We have hot springs in <u>Japan</u>. ・ I like <u>hot springs</u>. ・ You can eat <u>onsen-manju</u>. ・ It's sweet. </div>	5 7 5 10 3	<p>○ 前時までのワークシートを活用しながら発表することで、安心感をもたせる。</p> <p>○ 子どもから考えが出てこない場合は、教師が準備していたALTの紹介動画を見せることで、基本の発表との違いに気付かせる。</p> <p>○ 一度自分の発表を確認することで、不十分な点に気付かせる。その上で、「もっとよくするためにどうしたらよいか。」を全体で共有させる。</p> <p>※ 聞き手に分かりやすく伝える工夫に気付くことができたか。(行動観察・振り返りカード)</p> <p>※ ワークシートに表現を書き加えることができたか。(書き込み点検)</p>
	振り返る	<p>7 Looking back</p> <p>(1) 本時の学習を振り返る。</p> <p>(2) 次時の学習内容を確認する。</p>	3

自己調整の時間

個人→ペア→グループで考えさせることで子どもたちが既習表現を使って発表内容を考えさせる。

(イ) 板書の仕方



I like ○○.

Do you like ~?.

I can ○○.

It's famous for ~.

You can see ~.

You can eat ~.

This is ~.

Lesson4 Welcome to Japan.

Today's goal

November 17th.

日本のよきがもっと伝わるようにするため

には、どんな工夫をすればよいだろうか。

Key Phrases

Thursday

Welcome to Japan.

We have in .

It's .

Sunny

13:50 p.m.

+ 1 ワード

この単元での言語材料

板書は、毎回同じ構造になるようにしている。右側には初めの Greetings で聞いた日付や時間・天気など、真ん中には単元名・めあて・この単元での言語材料、左側には+ 1 ワードを記載するようにしている。板書を毎回同じように使うことで、授業の流れを明確にし、子どもたちが何をすべきかが分かるようになっている。

イ 既習表現集

授業で使ったワークシートを綴るために子ども1人に1冊ファイルを使用している。そのファイルの裏表紙にこれまでの既習表現集のプリントを貼るようになっている。その表現集を見ながら+1ワードを考えている。



ウ Activity の工夫

その単元の言語材料を定着させる活動だけでなく、既習表現を使えるようになるための活動を取り入れるようになっている。

1つ目が Dice Talk である。この活動では、サイコロを振り、サイコロが出た目のテーマで友達と会話をするというものである。既習表現を振り返るだけでなくリアクションの仕方も学ぶことができる



ので、今後もしできる限り取り入れていきたい。2つ目が Who am I Quiz である。初めのうちは教師側が出題者となり、慣れてきたら子どもたち同士で問題を考えさせ、出題させる。ここでは Who am I Quiz で使える既習表現を提示し、子どもたちで既習表現を想起させることを大切にしている。Who am I Quiz ができるようになることで、自己紹介や人物紹介の仕方など、あらゆる場面で活かすことができるようになる。



Who am I Quiz で使用のお題カード

- ① I am ... (職業・年齢など)
- ② I like... (好きなこと・好きなもの)
- ③ I have... (持っているもの)
- ④ I can... (できること)
- ⑤ I am good at... (得意なこと)

Who am I Quiz で提示する既習表現

エ 学習環境の工夫

これまでの授業で作成したものを教室に掲示することで、どの単元でどんなことを学んだのか想起しやすくなる。5・6年生の掲示を合わせてすることで、5年生は6年生のように英語を上手に書けるようになりたいと思うことができる。また、6年生は5年生の作品を読むことで自分のこれまでの学習を振り返りきっかけとなり、自分自身の成長にも気付くことができる。廊下には、子どもたちが立ち止まり、読みたくなるようなクイズ形式の問題やめくって読みたくなるような工夫を取り入れている。



英語ルーム教室後方掲示

リアクションの仕方を掲示めくると、どんな時に使う英語かを解説している。



クイズ形式の掲示



5 研究のまとめ

(1) 成果

- 習った言葉で自分の思いや考えを伝えるために、1人1人が考え、発表に取り入れようとしていた。
- 「+1」という言葉が定着し、個人で発表の内容を考えると、自然と+1を入れる子どもも増えている。
- 子ども同士の話合いの時間の中で、発表内容を深めていくことができた。
- 「何のために」「だれに対して」という目標を明確にすることで、伝える相手をしっかりと意識しながら発表に向けて準備をすることができた。
- 学習環境を工夫することで、高学年だけではなく低・中学年も外国語を身近に触れることができる。

(2) 課題

- 目標設定の上で「だれに対して」という相手を設定することが難しい。国際交流員のような情報を各学校で共有し合い、簡単に見つけられるようにしておく必要がある。
- +1ワードでは、一番身近な「I like ~.」や「Do you like ~?」の表現に頼りがちである。この表現以外の既習表現も使っていけるように指導していく。
- 既習表現を事前に考えておける発表の場では使えるようになってきたが、やり取りの場で使っていくことがまだ難しい。やり取りの場面を増やし、対応力を身に付けていく必要がある。

6 おわりに

この実践を通して、目標設定を明確にすることで、子どもたちは楽しんで外国語の学習に参加している。また、主体的に課題に取り組み、習った言葉で表現しようという意識が高まってきている。しかしながら、ALTも1カ月に1~2回程度しか来校できず、子どもたちが外国の方と触れ合う機会が少ない。今後は外国の方と触れ合う機会をもっと気軽に設定できる環境を増やしていくことで、より外国語を身近に感じながら学習できることができるのではないかと考える。

また、中学校へのスムーズなつなぎのためには、同中校区で統一した取組を行い、土台をそろえていく必要がある。中学に進学すれば外国語は主要教科のひとつとなり、毎日学習することになるだろう。主体的に自分の思いや考えを伝えることができる子どもを育成するためには、小学校はまだ入り口に過ぎず、今後中学校・高校へとつないでいくことを意識して指導しなければならない。そこで、小学校では国際社会を生きていくために外国語が必要であることを子どもたち自身が実感し、今後も学ぼうと意識させていくことが大切である。これまでに積み上げてきたことを生かしながら、外国語でコミュニケーションそのものを楽しんでもらえるような指導を続けていきたいと思う。

【参考文献】

「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編（平成29年度告示）」
「小学校における英語教育について」

文部科学省
文部科学省